

日向野を訪ねて

久保 トミ子

朝八時に大分を出発した地方史研究会の一行を乗せたバスは、国道十号線を南へ南へと進む。車中、渡辺博士・兼子教授・立川先生・その他の講師から、沿道に於ける歴史や地質についての詳しい講義をして頂く。戸次・野津・宇目を経て、バスはいよいよ日向路へかかる。左窓に太平洋の黒潮は躍り、晩秋とは思えぬ南国の陽を浴びてバスは益々快適

やがて右窓に海拔七二七、七米の可愛丘が近く見え出した。明治十年、我が中津隊の恨みも深き可愛丘だ。食っているように眺める。生き残りの中津隊士が、或るいは斬られ、或るいは捕えられた此の山麓で官軍に捕縛されたと聞く。彼の徳富蘆花の灰燼の主人公、上田茂が、せつかくの生還を、冷酷な兄に切腹を強いられた時「嗚呼可愛丘で死ぬべきであったのに」と悲痛な絶望の一語を残して自害して果てた；等を思い起こし感無量の中に車は過ぎる。

本日現地で説明して頂く、兼子教授のかつての恩師、高鍋市西原にお住まいの安田尚義先生のことを紹介され、弟子達の編纂発行したという歌集が車内で回覧された。

我が祖父も わが父もまた従いき

み命の山に立ちて涙す

母なくて淋しいわぬ娘なりしが

嫁ぎゆく日の涙はあつき

等を抜き書きしている時、ふと、先生の経歴の中に「廣池千九郎博士生誕百年の記念講演会に代表講演をなす」の記事に、思わぬ所で思わぬ人の名を見るものかな……：廣池博士は中津出身で、中津史を一番最初に書かれた独学の学者で今なお博士の遺訓を慕う全国数十万の人々がいる。この廣池博士に安田先生も教えを受けられたとは……とその奇縁に驚く。

川南町あたりで、黒木教育長・安田先生御夫妻を迎えてバスは国道からは村道を高城に向かう。高城に着いたのは正午もグット下がつて一時を過ぎていた。立川先生の御指揮で忠魂碑の前で英霊に一分間の黙禱を捧げ終わると大急ぎで昼食にかかる。

高城々跡に立てば西南に高城平野・小丸川を望み、西北は眼下七米に壁立し、はるか岩戸原に続く。此の高城は丘陵を以って要害としていたが、削築は不明。されど、建久二年、新納近江守時久、高城の地頭となりしが、上京の留守を狙って、畠山修理亮直頭が攻め

て此れを乗つ奪り、その後、財部の土持氏の將、山田信介有信が城主となつたとのことである。

元龜二年（一五七二）から天正六年（一五七八）にかけては、大友氏空然の黄金時代をきたした。それは、豊前豊後・筑前筑後・肥前肥の六州の守護並びに伊予・日向の各半国を管領し得たからだ。

ところが宗麟の配下であり一族となつた伊東義祐は、島津義久と戦つて敗れ、天正五年正月、国を追われて、子の義益と共に、宗麟の許に逃れて来ていた。島津が伊東の領地を奪い日向の大半を占領すると、北の土持親成も宗麟に叛いて島津に従つた。そこで宗麟は天正六年秋老臣達の諫めも聽かず、十字架の旗高く風になびかせながら、六ヶ国と伊予日向の大軍五万を發し、田原紹忍を総大將に、島津討伐の爲、堂々と臼杵を出発し高城に迫つた。城の四方五ヶ所に陣を布く、城將山田信介有信は僅か五百の兵にて城を守つていた。此の時、大友軍は一挙に攻略すれば、なんなく城は落ちたであろうに、氣長に兵糧攻めの策をとつた。大友軍の中でも齋藤勢は無二無三に攻めたて、山より木を伐り出し、束ねて城西の峰上に運び、転ばし落とし谷を埋め火を放てて城兵は居たたまれず、二の丸に籠り、直ぐ陥落しそうに見えた。

島津義久の援軍が佐土原に、義弘は都於郡、行久は高鍋に迫つた。

これを見た大友軍は美々津に退き川を隔てて陣、出撃不利と見た島津軍は暫く動かずにいたが、大友軍の一部が渡河すれば全軍これにない、島津勢との大激戦となり、大友軍の主だつ部將や兵士三千余人は枕をならべて討死した。

大友軍の大敗の原因は倭臣田原紹忍だけを重く用いたこと、並びに日向出陣の前七月、宗麟はキリシタン嫌いの正妻奈多氏を離婚し、次子親家の妻の母を後妻に迎え、反対をおし切つてキリシタンに入信した為、社寺や家臣の心が離反し、軍議一致、統制を欠き、土氣が全く挙がらなかつた。我々豊人にとっては、実に痛恨惜く能わざる高城ではある。春風秋雨四百年、此の日向野に眠る大友三千の靈は、今日我が郷土人多数の訪れの感慨や如何？

敵將山田信介は軍を収む時、敵となく、味方なく、死者の靈を集めて供養塔を建立した。其の博愛の精神は、彼のクリミヤの野におけるナイチンゲールに先だつこと二百七十年という。

また天正十五年、秀吉島津討伐の軍を進めるや、羽柴秀長を大將とし黒田孝高等らの高城を攻落すること二十日余、山田信介千三百の兵にてよく守る。羽柴は信介に対して、「我に従わんか天草四方石を興えん」と言いしが、信介「主君島津に下賜さるれば……」とて降らなかつた。然し、島津氏秀吉に降服の爲、やむなく開城、

高城を去つたという。

一同、高城跡にて黒木教育長の説明を聴き終わるや、川南町湯迫の台地、通称カンカン原の石灯笼式六地藏を訪ぬる。台地は一面の薩摩芋畑で、既に収穫は終わり、黒い土は秋の陽に息ついている。バスの通れぬ農道に咲いたひめじよん・よめなの花を踏み分けて行けば、やがて、蜜柑畑・茶園にいで更に進むと、松の一叢立つ中に、高さ二・八米の石灯笼の立つ古塚がある。此処にて安田尚義先生のお話を聴く。

供養塔には「謹奉誦大乘妙典一千部為戦亡霊」と正面に刻まれ、其の左右に「千時天正十三年二月彼岸日大施主源有信山田信介」「迷故三界悟故十万空」「本来無東西何処有南北」「諸行無常是生滅法生滅々已寂滅為楽」と刻まれている。天正六年の高城・耳川の戦死者の為に山田信介が建立したものである。

史学会の一員田北暢舟氏の読経の中に、全員の捧げた香の煙は、あたりを紫色にたちこめ、其の中にゆらぐろうそくの焰は幽幼の世界に魂を誘う。

これ程多数の郷土人の供養は、此の地に於いては物故以来初めてではあるまいか？時折り森を震わす松声も、三千余の魂魄が、四百年來はじめて相見る郷人の姿に感応する声かと聞かれ、或るいは亦、戦争

の罪惡を切々と訓す声かとも聞こゆ。

里人達の間には、徳川時代より、虫祈禱がさかに行われ、此の古塚の土を田畑にまけば虫よけになると言い伝えられ、明治大正の初め頃迄は、供養祈願者が多く鐘の音が絶えなかつたのでカンカン原の名で親しまれてきたが、其の後は次第に風習も廃れ、蔓草ははびこり荒れ果てていたという。

東京都出身の梯氏は、農業研究の為、宮崎農業学校に入学し、大正十年、川南町七文字原に入植してより、此の荒れ果てた無縁の古塚のために供養を続けること数十年に亘ることを知り、我々豊人のなし得ぬ長年の奉仕に一同感激し、夫人梯てる子氏に供養塔前にて感謝の意を表した。

手広く茶・蜜柑園等を経営している梯邸にて丹誠の蜜柑を頂き、夕残りを惜しみつつカンカン原を去る。

日も既に没すれば、途中、安田夫妻、黒木教育長に別れを告げ帰途につく。

その昔、神武天皇御船出の美々津の川口に立ち寄る。高く大きい御遺蹟の碑を仰ぎ、潮の香を胸一杯に吸う。美々津川を出る頃は暮

色も次第に濃くなっていた。

勇ましく戦つて傷つき、十六才の花の蕾のまま、父の腕に抱かれて息をひきとつたというキリンタン少年田原親虎をはじめ、三千の將士の霊のなお安らかに眠るであらう日向野を後にした。

(昭和四十二年十一月二十六日記)

(中津市上富永町四丁目)